

私の芸の原点

三代目 花柳寿美

・出会い

私の祖母 初代花柳寿美は、大正時代はじめ、“新橋七人組”と云われた新橋の花形芸者の一人でした。二代目花柳寿輔師が、六代目尾上菊五郎の部屋子となって、尾上菊太郎を名乗っていた事もあって「戻り橋」等、花柳流の大事な演目で歌舞伎の為に振付けされたおどりとして、六代目菊五郎のおじ様に教えて頂いた事もあり、舞台人として、又、とても良いお友達として、お付き合いが続いて居りました。

祖母は、私を舞踊家にしたいと云う夢を持っていた様で、二人の話し合いがあったのでしょ、私を部屋子として預って下さる事になりました。しかし、戦争が激しくなり、終戦後、早速に昭和二十一年一月、師弟の御杯をかわして、直筆の御免状を頂いて、尾上菊花を名乗りました。これが私の芸の第一歩、満四才、歌舞伎の子役としてでした。

・初舞台

銀座四丁目附近は、歌舞伎座、新橋演舞場が焼けて、東劇だけが残っていました。東劇で六代目のおじ様が座頭になって、東京に居た歌舞伎役者を全部集めて、歌舞伎興行が打たれました。

部屋子だった私は、座頭の六代目のおじ様の隣の部屋で二十五日間過ごしていました。菊五郎のおじ様の本名が寺島と云われたので“寺爺”と云って慕っていましたし、とても可愛がって下さいました。

「良寛と子守」が出ていて、六代目のおじ様が良寛で、子守は、今の清元延寿太夫のお母様多喜子さん、私は一番小さな村の子供でした。良寛が「…最後に兎は何も食べる物を捜してこれなかったので、たき火の中に身を投げ“私を食べて下さい”と云い、と、おじいさんは実は仙人で…」と云って扇を兎にたとえて拾い上げて、「ごらん、月の中でお餅をついている兎が、実は、その兎なのだよ」と、お話しを踊って下さるのですが、私は、毎日同じなのですが、「兎さんて、可哀相、でもお月様の中で幸せだろうナー」と、本当に感心して見入っていました。毎日、子供達を、楽しませて下さると云う事は、きっとお客様も、大きな感動を受けられた事と思います。

がらり変って「助六」では、揚巻役から、かんべら門兵衛に早替りされました。私は、揚巻に、酔ざましを差し出す禿役でした。舞台裏にたらいを用意し、おしろいを全部落して、ゆかたをまと

い出て行かれていましたので、当然私は、二役を、誰でも替われるのだと思っていました。でも、風邪を引かれて、一週間も休まれてしまい、私も、六代目のおじ様の禿役ですので、元気でしたが、一緒にお休みを云う事になってしまいました。

「六歌仙」の喜撰の小坊主で、六代目のおじ様が名前を披露して下さいました。小町役の七代目澤村宗十郎さんは、楽屋では、皺がいっぱいの御顔の方でしたが、不思議な程に、美しく変身なさいましたし、六代目のおじ様の業平も、とても美男子で素敵でした。喜撰も、幾重にも重たげな裾が、よく似合われて、とても偉い御坊様なのだと納得させて下さいました。

・感じた事

子役でも、芝居と芸居の間の三日間程できちんと覚えなければならぬ事は、早く覚える訓練になりました。又、興業の二十五日間は、熱があっても舞台はきちんと勤めなければならぬと云う忍耐強さも、修得出来ました。舞台の上で、自分の役居るべき場所というものも、知らず知らずのうちに、身につけて頂く事が、大きな、勉強になっています。九代目坂東三津五郎さんと大川橋蔵さんが、「三社祭」を三越劇場で上演された時、御稽古を見せて頂きましたが、教える六代目のおじ様も習う方も、パンツひとつでして頂いていましたし、私も男のものを踊る時は、六代目仕込みで、浴衣のお尻をはしょられて、足がきちんと割れる様に、稽古をさせられました。

・プロとアマ

一番の悩みです。私は舞踊家として生きているつもりですが、外の方々には、どの様に見ていられるか、とても疑問に思っています。私は、教える時、自分自身の御稽古と思い、ずるをしないで、精一杯踊ります。そして、オーバーと思える程に表現しながらお弟子さんをひっぱる事が必要です。すると、教える為のおどりが舞台に出てしまうおそれがあります。やはり、教えると云う事を、舞台でのおどりととは、分けて考え、表現しなくてはならないと思っております。

六代目のおじ様の元で、とても貴重な体験をさせて頂き、舞台人として、本当の舞踊家として踊っていきたいのですが、いつも、そこで、プロとアマの問題のむずかしさに行きついてしまい、これから先の、日本舞踊のあり方を考えてまいります。